

---

## 参 考 資 料

---

### (1) 受賞者について

- 1 氏 名 タイモン・スクリーチ (Timon Screech)  
2 生 年 1961年  
3 現 職 国際日本文化研究センター研究部教授  
4 略 歴

1991年 ハーバード大学大学院美術史研究科 博士課程 修了  
1991年-2007年 ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 准教授  
2007年-21年 ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 教授  
2021年-現在 国際日本文化研究センター 教授

### (受賞歴)

2014年 駐英日本大使より特別表彰 ( Freeman of the City of London)  
2014年 ロンドン名誉市民権 (Special Commendation from Japanese Ambassador to the United Kingdom)  
2015年 ロンドン市布取引座付属学院学者 (Liveryman of the Guild of Mercers' Scholars)  
2016年 欧州学士院フェロー (Member of the Academia Europæa)  
2018年 英国学士院フェロー (Fellow of the British Academy)  
2019年 王立芸術協会フェロー (Fellow of the Royal Society of Arts)

### (主要著作等)

#### 著書

- The Lens within the Heart : The Western Scientific Gaze and Popular Imagery in Later Edo Japan. Cambridge University Press, 1966
- 「大江戸視覚革命 十八世紀日本の西洋科学と民衆文化」 作品社 1998 (上記日本語版)
- Sex and the Floating World : Erotic Imagery in Japan, 1720-1810. Reaktion Books, 1999
- 「春画 片手で読む江戸の絵」 講談社 1998 (上記日本語版)
- The Shogun's Painted Culture : Fear and Creativity in the Japanese States, 1760-1829. Reaktion Books, 2000
- 「定信お見通し 寛政視覚改革の治世学」 青土社 2003 (上記日本語版)
- Japan Extolled and Decried : Carl Peter Thunberg and the Shogun's Realm, 1775-1796. Routledge , 2005
- Secret memoirs of the shoguns : Isaac Titsingh and Japan, 1779-1822. Routledge, 2006
- Obtaining images : Art, Production and Display in Edo Japan. University of Hawai'i Press, 2012
- Tokyo Before Tokyo : Power and Magic in the Shogun's City of Edo. Reaktion Books, 2020
- The Shogun's Silver Telescope : God, Art, and Money in the English Quest for Japan, 1600-1625. Oxford University Press, 2020
- 大江戸異人往来 丸善 1995
- 江戸の身体 (からだ) を開く 作品社 1997
- 江戸の思考空間 青土社 1999
- 江戸の英吉利熱 ロンドン橋とロンドン時計 講談社 2006
- 江戸の大普請 徳川都市計画の詩学 講談社 2007
- 阿蘭陀が通る 人間交流の江戸美術史 東京大学出版会 2011

## (2) 贈呈理由

タイモン・スクリーチ氏は、江戸時代の文化史・美術史研究の第一線で活発な研究・執筆活動を展開してきた。日欧交流史の中で美術作品や視覚情報が果たした役割の解明、身体論と結びつけた春画の研究など、斬新な視座からの日本の近世史研究は高く評価される。

長年、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(University of London, SOAS)で教鞭をとられ、現在は国際日本文化研究センターの教授職にあり、江戸初期の武士神格化、全国東照宮のネットワーク、近世の琉球王国の交流史について、研究を進めている。独自の視角で日本文化の核心を解き明かす手際は傑出している。

今年度、スクリーチ氏の『Tokyo Before Tokyo—Power and Magic in the Shogun's City of Edo (2020)』、『阿蘭陀が通る一人間交流の江戸美術史』(2011)、『Sex and the Floating World : Erotic Images in Japan, 1700-1820 (1999)』の三著が、山片蟠桃賞贈呈の対象に決定した。江戸時代の文化を幅広く論じ、英語圏で日本文化の理解を広めている功績は大きく、著作の多くは日本語に翻訳されている。

なかでも『阿蘭陀が通る一人間交流の江戸美術史』は、江戸時代の長崎の出島を中心に、当時日本にやってきたヨーロッパ人たちと日本人たちとの交流の記録をまとめたものである。道中多くの国際交流が行われた、「参府」と呼ばれるヨーロッパ人の江戸への旅についても紹介されている。当時の様々な絵画もふんだんに掲載され、絵画として残された歴史を知ることができるのと同時に、当時の日本での国際交流における絵画の役割についても示されている。江戸時代の文化、特に当時「鎖国」であった日本における東西文化交流の実体に関心を持つ全ての研究者そして多くの学生に読んでもらいたい。

## (3) 受賞者メッセージ

国際日本文化研究センター研究部教授  
タイモン・スクリーチ

この度、山片蟠桃賞に選ばれたことは大きな光栄であり、非常に嬉しく思っています。この賞を受賞した先輩方には、私の博士論文の指導教授であったハーバード大学のジョン・ローゼンフィールド教授や同じイギリス出身の同僚でもあるケンブリッジ大学のピーター・コーニツキー教授がおられます。お二人は江戸研究の第一人者であり、私にとってはインスピレーションの源の様な方々です。私の仕事がそうした方々の側らに並ぶに値するという評価をいただきましたことは、私にとっては信じられないことです。

2022年という年にこの賞をいただいたことにも特別な喜びを感じています。昨年夏に30年間日本美術史を教えてきたロンドン大学アジア・アフリカ研究学院を去り、日本に移住しました。昨年還暦を迎え、現在は、大阪からほど近い同じ関西圏の京都にある国際日本文化研究センターに所属しております。私がこれまで経験した日本は主に東京でしたので、新しい生活体験として毎日を楽しく過ごしています。

賞名にもなっている山片蟠桃は江戸研究者であれば誰もが知る人物です。彼は商人でもあり、視力に問題を抱えていました。家族も学者を輩出する家系ではありませんでしたが、学問で成功しました。様々な画期的、衝撃的な思想を体現し発展させた人物です。彼が没したのは1821年ですから、3年に一度のこの賞では今年が没後200周年に最も近い年となります。山片蟠桃といえは、独創的な研究を行うだけでなく、社会の役に立ちたいと望む全ての学者にとって手本となる人物です。

私が1980年代に江戸時代の研究を始めた頃は、江戸時代といえは人はすぐに「鎖国」を連想しました。しかし、多くの学者が江戸時代の日本は閉ざされていたという前提を再考しようとしてきました。実際に閉ざされてはいなかったのです。明王朝の政策に倣って徳川家光が「海禁」政策をとったのは事実ですが、これは日本人が海外に出るにはいけないという意味であり、外国人が来てはならないということではありませんでした。長崎では唐人屋敷と呼ばれたチャイナタウンが賑わいを見せていましたし、朝鮮や琉球から使節団もやってきました。オランダ東インド会社は長崎に常設の商館を持っていましたし、大坂、京、江戸には専用の宿もありました。そして社員はもちろんオランダ人だけではなく、ドイツ人、スウェーデン人、スイス人もいました。とはいえ、私の目的は「徳川外交」の研究だけではなく、外国の物品がどのように日本の文化自体に入り込んでゆくのかに関心がありました。輸入品はハイレベルな外交の舞台で将軍への贈り物としてもやってきましたが、商品として店先に並んでもいたのです。また、見世物小屋で使われたものもありました。私にとって特に興味深かったのは、そうした外国から来た物品の国内での消え失せ方でした。つまりモノとともに入ってきた思想がやがて日本人の心の中に浸透し、日本人という一つの原住民の一部を成してゆくその過程です。言い換えれば、江戸文化とは国際的なハイブリッドであったのです。それは驚くべきことではありません。どの文化も結局はそうなのですから。

大阪府からのこの輝かしい激励を得て、今後もこれまでもまして研究に邁進して参る所存でございます

ます。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

※日本語訳は受賞者によるもの

**(4)過去の受賞作、受賞者**

(年齢・職名・国名は受賞当時)

回・年度	著作	著者	国名
第1回 (昭和57年度)	“World Within Walls”をはじめとする著作 (日本文学史の研究)	ドナルド・キーン(60) (コロンビア大学教授)	アメリカ合衆国
第2回 (昭和58年度)	“Lessons from History”をはじめとする著作 (新井白石の翻訳)	ジョイス・アクロイド(65) (クイーンズランド大学教授)	オーストラリア連邦
第3回 (昭和59年度)	『日本語の中のオランダ語』をはじめとする著作 (日蘭交流史の研究)	フリッツ・フォス(67) (国立ライデン大学名誉教授)	オランダ王国
第4回 (昭和60年度)	『日本の万葉集』をはじめとする著作	金 思燦(73) (東国大学校教授兼同大学校付設日 本学研究所長)	大韓民国
第5回 (昭和61年度)	『10-13世紀日本文学における日記と随筆』をは じめとする著作	ヴラジスラフ・ゴレグリヤード(54) (リ連・科学アカデミー東洋学研究所に ンガード支部極東部長兼にンガード大 学日本語科主任教授)	ソビエト社会主 義共和国連邦
第6回 (昭和62年度)	『日本古典文学事典』をはじめとする著作 (古典文学の研究)	アール・マイナー(60) (プリンストン大学教授)	アメリカ合衆国
第7回 (昭和63年度)	『道行文』をはじめとする著作	ジャクリヌ・ビジョー(49) (パリ第7大学教授)	フランス共和国
第8回 (平成元年度)	『18世紀日本の『徳』の諸相—大坂商人の学問所・ 懐徳堂』をはじめとする著作(近世思想の研究)	テツオ・ナジタ(53) (シカゴ大学教授)	アメリカ合衆国
第9回 (平成2年度)	歴史的日本に対する文明論的あるいは学問的考察に基 づく一連の著作	サー・ヒュー・コータツィ(66) (元駐日英国大使)	英国
第10回 (平成3年度)	“The Tale of Genji”(『源氏物語』全訳)の翻訳をは じめとする一連の著作	エドワード・サイデンスティッカー (70) (コロンビア大学名誉教授)	アメリカ合衆国
第11回 (平成4年度)	『坂本龍馬と明治維新』をはじめとする一連の著作 (日本近世、近代史の研究)	マリウス・ジャンセン(70) (プリンストン大学名誉教授)	アメリカ合衆国
第12回 (平成5年度)	『御堂関白記』をはじめとする著作 (御堂関白記の翻訳と詳細な注釈)	フランシヌ・エライユ(64) (国立高等研究院教授)	フランス共和国
第13回 (平成6年度)	『大英図書館蔵日本古版本目録』をはじめとする著作 (大英図書館蔵の日本古版本の書誌研究)	ケネス・ガードナー(70) (元大英図書館東洋コレクション副 主席)	英国
第14回 (平成7年度)	奄美・沖縄を中心とする調査と研究をはじめ、民族学 的考察に基づく日本研究の一連の著作 (奄美・沖縄を中心とする民族学研究)	ヨーゼフ・クライナー(55) (ボン大学教授、ドイツ-日本研究所 所長)	ドイツ連邦共和 国
第15回 (平成8年度)	『中日文化関係史論』をはじめ、日本の歴史と文化の 研究に基づく一連の著作 (歴史・文化の考察及び日中文化関係史の研究)	周 一良(83) (北京大学教授)	中華人民共和国
第16回 (平成9年度)	『地球と存在の哲学環境倫理を越えて』にいたる一連 の著作(風土論を通じた日本文化研究)	オギュスタン・ベルク(55) (国立社会科学高等研究院教授・現 代日本研究所長)	フランス共和国
第17回 (平成10年度)	日本研究推進への多年の貢献と、『古事記』の言語学 的考察による一連の著作	ヴィエスワフ・コタンスキ(83) (ワルシャワ大学名誉教授)	ポーランド共和 国
第18回 (平成11年度)	多年にわたる日本文学・日本文化史研究の功績と『も う一つの中世像』を中心とする一連の著作 (物語絵本や尼僧(門跡尼寺)の研究)	バーバラ・ルーシュ(67) (コロンビア大学日本文学・文化名誉教 授、中世日本研究所所長)	アメリカ合衆国
第19回 (平成12年度)	『近世崎人の芸術』と、日本美術研究に関する一連の 著作(日本の仏教美術史・近世絵画の研究)	ジョン・ローゼンフィールド(76) (ハーバード大学東洋美術史名誉教 授)	アメリカ合衆国
第20回 (平成13年度)	“Embracing Defeat”(邦訳『敗北を抱きしめて』)をは じめとする一連の著作(日本の戦後史の研究)	ジョン・ダワー(63) (マサチューセッツ工科大学教授)	アメリカ合衆国
第21回 (平成16年度)	『余暇を通じてみた日本文化』『拳の文化史』をは じめとする余暇社会学、娯楽史的分野に関する一連の著 作(日本の戦後史の研究)	セップ・リンハルト(60) (ウィーン大学日本学教授)	オーストリア共 和国
第22回 (平成19年度)	“A Waka Anthology, Volume One”をはじめとする一 連の著作	エドウィンA. クランストン(75) (ハーバード大学日本文学教授)	アメリカ合衆国
第23回 (平成22年度)	『日蔵漢籍善本書録』をはじめとする一連の著作	嚴 紹璽(70) (北京大学教授)	中華人民共和国
第24回 (平成25年度)	『日本の書籍—始発より19世紀にいたる文化史』及び 江戸時代の書籍文化に関する一連の著作、また欧州所 在の日本古典籍の書誌調査に基づくデータベースの整備	ピーター・コーニツキー(62) (ケンブリッジ大学教授)	英国
第25回	『日本史—侍からソフト・パワーへ』をはじめとする	ウィリー・F・ヴァンドゥワラ	ベルギー王国

(平成 28 年度)	一連の著作	(66) (ルーヴアン大学名誉教授兼特任教授)	
第 26 回 (令和元年度)	Japan and the Culture of the Four Seasons : Nature, Literature, and the Arts (四季の創造 日本文化と自然観の系譜)	ハルオ・シラネ (67) (コロンビア大学 東アジア言語・文化学部教授 (日本文学・日本文化)、学部長)	アメリカ合衆国

## (5) 山片蟠桃について

山片蟠桃(やまがたばんとう、1748～1821)

大坂の豪商升屋の大番頭として活躍するとともに、『夢ノ代』を著して、封建制下に驚くべき合理主義を展開した、江戸時代後期の町人学者。本名は長谷川有躬、のち山片芳秀と改めた。通称は升屋小右衛門、蟠桃はその号である。

播磨国印南郡神爪村(現、兵庫県高砂市)に生まれ、大坂に出て升屋の別家を継いだ。本家升屋の苦境に際して敏腕をふるい、仙台藩にかかわりつつ、仙台藩および升屋の財政再建に成功した。しかも升屋を、全国数十藩を相手とする大名貸に成長させた。これにより、1805年(文化2年)升屋の親類並み(親類次席)にあげられ、公儀から徳行を賞されてもいる。

学問は、懐徳堂で中井竹山・履軒に儒学を学び、さらに麻田剛立に新しい天文学を学んで、蘭学にも深い関心を持つに至った。生涯を通じての学問上の成果は、大著『夢ノ代』12巻に集大成されている。卓抜な経済論をとらえ、一切の神秘主義を否定して無神論を主張するだけでなく、地動説を確認したうえで、宇宙には私たちの太陽系と同じものが無数に存在するという、大胆な大宇宙論さえ展開した。この創意と創見とに満ちた現実的・合理的思想は、近代的世界観成立史上、とりわけ光彩をはなつものである。